

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 18 日現在

機関番号：12613

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2011～2014

課題番号：23402037

研究課題名(和文)組織間関係論の国際実証研究

研究課題名(英文)The Transnational Empirical Research of Inter-organizational Relations

研究代表者

西口 敏宏(NISHIGUCHI, Toshihiro)

一橋大学・大学院商学研究科・教授

研究者番号：20270928

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 6,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、(1)強固で排外的なコミュニティー凝集性を示す温州人の企業家ネットワークでは、その構造優位を支える、血縁・同郷という確固たる同一尺度に基づく強靱な信頼関係が醸成されており、そのため、(2)同コミュニティーの成員間では、この「同一尺度の信頼」によって、ネットワーク分析とコミュニティー運営の両面で、予測と制御の可能性が増すことを実証的に論じた。コミュニティー・キャピタルという新たな中範囲の概念は、旧来の社会ネットワーク分析の方法論では捨象され、その存在すら忘れられがちであった「不都合な真実」に再び光を当て、より豊かで有用な知見の導出に貢献する。

研究成果の概要(英文)：This study examines community-level social capital, or community capital for short. Building on existing literature on social capital and supply chain networks, we specifically look at the community networks that evolved among the natives of China's Wenzhou, often referred to as the birthplace of spontaneous Chinese capitalism. A key is to understand in depth whether and how individuals interact in local contingencies, to form a coherent pattern that may facilitate or inhibit further collective action. To what extent, moreover, is such pattern generation a product of community norms, values and strategies shared by community members? Drawing on extensive fieldwork, we find "commensurate trust" shared and enjoyed among its exclusionary community members a key to decode the secrets of their success as well as to limit their evolvability.

研究分野：経営学、組織論、ネットワーク論

キーワード：ネットワーク コミュニティー・キャピタル 同一尺度の信頼 温州 中国

1. 研究開始当初の背景

Watts 等 (1998, 1999, 2003) は、ノード (結節点) 間のつながりが基本的には規則正しいが、一部にランダム性をもつ構造のネットワークが、機会の探索や情報伝達特性の面で優れていることをシミュレーションで示すとともに、トポロジー (情報伝達のつながり構造) に注目するネットワーク研究を推進し、学際的影響を与えた。社会科学の各分野では、シミュレーションや共著者関係等の定量データによる大規模ネットワーク解析が進んだが、各ノードを単なる情報の通過点とみなし、所与の情報の全透過を前提とするなどの限界も指摘された (Fleming et al. 2007)。

他方、現実の人間社会では、自動車の部品供給構造や政府調達に関する実証研究に基づき、ノード間の信頼関係の有無が、伝達情報の量、質、速度の重要な決定因子であることが論じられた (Womack et al. 1990, Fujimoto 1999, 西口 2007)。

このように最新のネットワーク論を援用して社会事象を扱った議論は進展しつつあるが、経営学の視点から、こうした知見が従来の組織間関係論のアプローチにいかなる洞察をもたらすのか、正面から論じた研究は意外に少ない。特に、複雑性が激増する国際環境変化に成功裏に対処しうる今日の組織間関係のあり方、機械的处理に馴染まないノード間の信頼やソーシャル・キャピタルといった社会的要素の扱い、現実に誰がいかなる条件のもとでノード間関係を維持、管理し、改廃しているのか、といったメカニズムの実証的解明は大方未知の領域にある。

本研究では、中国の中でも、諸資源の不足にもかかわらず躍進する温州、および、海外で大成功した温州人企業家のネットワーク特性と組織間関係のマネジメントに注目し、その実情把握と体系的な実証分析に努める。まず、温州人の海外進出先を中心に、国家や国際関係といったマクロレベル、地域や企業、コミュニティ等のメソレベルで、温州人がいかなるネットワーク構造に組み込まれているかを実証的に把握する。さらに、ローカルな文脈における人や組織の緊密な関係性と、グローバルな文脈における緩やかな組織間関係の間に相補的なバランスが保たれる時、システム全体の生存能力は強まり持続的繁栄につながるのではないかという想定の下に、最新ネットワーク論を援用しながら、上述 ~ の詳細なメカニズムの解明を目指す。

具体的には、繁栄する個人や組織がどのノードとつながり、いかなる情報やモノ、カネを得、各位の環境下で活動しているのか、必要な組織間関係をいかに新規開拓し、あるいは、既存の関係性の改変によって形成しているのか、といったミクロレベルの詳細な分析を行う。この側面は既存文献に体系的な記述がほとんどなく、徹底した国際実証研究を要する。また、必ずしも定量化に適さないノ-

ド間の質的な関係や、情報伝達の実効性等の定性的な考察も必要である。

2. 研究の目的

本研究は、国際発展の目覚ましい新興華人による組織間関係の事例を比較分析し、その企業家活動の形成と発展のメカニズムを実証的に検証し、最新の知見を得ることによって、組織間関係論のフロンティアを探ろうとする試みである。近年、米国を中心に数理モデルを用いたネットワーク研究が進展したが、シミュレーションや共著者データ等に依拠したネットワークのマクロ構造分析が主であった。本研究は、そうした既存研究を経営学的視点から見直し、属性の異なる個人や組織同士の連携がいかなる構造変化を生み、いかに機能する時に成功につながるのか、そのミクロメカニズムを実証的に探究する。最新のネットワーク論の知見を組織間関係論の視座に織り込み、組織間の戦略策定や意思決定に理論的・実践的な知見を提供することを企図する。

3. 研究の方法

上述の前提に従い、本研究の中核となる海外在住の温州人企業家への聞き取り調査は、研究代表者が、一橋大学留学生等の人材プールから、適宜、資質に優れ日本語に堪能な学生等を研究助手兼通訳として雇い、支援を受けながら実施した。また、調査準備および収集した資料の整理や分析等は、彼らもしくはそれに匹敵する適任者等を雇用し、実施してもらった。さらに、進出先等の地元政府や各種業界団体等の協力が得られた場合、聞き取り調査に加えて、部分的とはいえ質問票調査を組み合わせた研究を遂行した。これと併行して、組織間関係論や社会経済ネットワークに関する理論研究も持続的に行い、理論と実践の両面でバランスのよい研究を推進した。そして、中国国外だけでなく、中国各地にある温州人街の温州人企業家の聞き取り調査も実施した。

4. 研究成果

(1) トヨタなど企業グループのパフォーマンスを分析するにあたっては、個別社員の属性や国民性よりも、傘下のサプライチェーンを含めて形成される一大企業コミュニティの社会構造と価値体系が、競合他社のそれらに対して、比較優位を有することが論じられてきた (Womack et al. 1990, Fujimoto 1999)。

本研究は、そうした「コミュニティ」に起因するパフォーマンス上の違いを分析するにあたり、技能や学歴といった「個人」に属する「個人的資源」でも、「社会全般」に行き渡る社会規範や国民文化に基づく広義の「社会関係的資源」でもなく、その中間的概念として、特定のメンバーシップによって明確に境界が定まり、その成員間でのみ共有

され利用され得る資源としての「コミュニティ・キャピタル」(community capital) に注目した。つまり、ここで新たに提起される概念は、経済学でいうヒューマン・キャピタル (Schultz 1961, Becker 1964) でも、経済社会学や政治学で馴染み深いソーシャル・キャピタル (Coleman 1988, 1990, Putnam 1993, 2000) でもなく、あくまで中範囲の理論の範疇としての、特定のコミュニティにおける成員間に生じ交換される限定的な関係資源であり、彼らによってのみ有効裏に利用される共通の資源を指す。表面的には同じような経済活動を続ける2つの競合コミュニティで、両者で繁栄の程度が時に著しく異なるのはなぜか。他の条件を同一とすると、個人はいかなるコミュニティに属すれば、より大きな繁栄を入手できるのか。「コミュニティ・キャピタル」は、そうした疑問を解きほぐす鍵となる概念である。

傑出したパフォーマンスで知られる中国・温州人企業家の国際的ネットワークは、コミュニティ・キャピタルに依拠する新たな社会ネットワーク分析に適した事例であり、近年ビッグデータで辺境の観のある米国の定量分析 (Fleming et al. 2007) を補完する意味で、詳細なフィールド調査に基づく豊かな実証的知見を提供した。さらに Watts 等 (1998, 1999, 2003) がシミュレーションで数学的に立証したスモールワールドの知見が、現実に応用可能なのは、実効的にコミュニティ・キャピタルに支えられた社会ネットワークに限定されることも示唆された。

(2) 諸資源に恵まれず高学歴でもない温州人企業家が、中国国内と主な進出先である欧州を結ぶ機能的なネットワークを形成して大繁栄を築くことができたのはなぜか。同時期に出現した他の地域出身の新華僑と比べ、概して彼らのパフォーマンスが傑出しているのはなぜか。さらに、近年、不動産投資や高利貸し等のマネーゲームに敗れ、資金繰りに窮した一部の温州企業経営者の逃走や企業倒産が注目を集めたが、こうした苦境はいかなる事由に起因しているのか (西口・姜・辻田 2012)。

これらの問いに対して、温州人企業家の国際的ネットワークを詳述する本研究は、彼らのノード間関係、情報伝達の実効性、ならびに、属するコミュニティのあり方に着目し、そのメカニズムを、丹念なフィールド調査で収集したオリジナル・データで質的・量的に分析してきた。具体的には2004~2015年の11年間、中国、日本、欧州、ロシア、ウクライナ、中近東、米国等を含む、温州人企業家の活躍する計17カ国、51都市で、政府、企業、同業・同郷団体、研究所、報道機関など、435機関で642名に1635時間半インタビューし、温州人企業家のコミュニティで醸成される関係資源の実態を詳細に追ってきた。ここで問題となるのは、アトミスティックな

経済主体の行為が需給関係の均衡の下で一意的に定まるとする新古典派経済学の考え方には把えきれない経済社会学の領域、つまり、ある経済主体が必然的に「埋め込まれ」影響し合うソーシャル・コンストラクト (社会的な構成実体) を突き動かす力であり、そのメカニズムの解明である (Polanyi 1944, Merton 1968, Granovetter 1985)。

(3) 中国で最貧地域の1つだった温州がどのようにして、靴やアパレル、金属製ライター等、日用品の世界的産地になったのか、また、貧しい農民がいかにして有能な企業家に転じたのか。過去30年にわたる温州の飛躍的な発展にとって、温州人同士の強い信頼関係が支えるコミュニティの閉鎖的な凝集性がある一方で、環境変化に合わせて、大胆で柔軟なリワイヤリングによって人々のつながり構造を変え、効率のよい情報収集を可能とする比較的少数の「ジャンプ型」人材 (jumper) の役割が、国内外の離郷人の中でも、特に重要であった。さらに、他の中国地域出身者とは異なり、ジャンプ型が孤立せず、同郷人コミュニティに深く埋め込まれ、同郷人の多数を占める「動き回り型」(active mover) および「現状利用型」(passive recipient) にも、遠方からの冗長性のない有益情報を伝えて共有し、相補的に繁栄する特徴あるネットワーク構造を築いた。つまり、最新のネットワーク論の用語でいえば、高いクラスター係数とショート・パス・レングスを兼ね備えたスモールワールド的な特徴が再確認された (Watts and Strogatz 1998, Watts 1999, 2003)。

企業家のネットワーク戦略の一環として、本研究で確認され、統計的に有意なクラスター分析結果とともに提示される上記の3類型、つまり「現状利用型」、「動き回り型」、「ジャンプ型」は、次の特徴を持つ (西口・辻田 2016a)。「現状利用型」は、受動的に直近の人間関係のみに依存するタイプで、「近所づきあい」が交友範囲の中心であり、ほぼそこでのみ問題解決を図ろうとする。対して、「動き回り型」は、既存の人間関係をベースにしながらも、自分が知らなかった新たな世界に関心を持ち、その周辺でも新規の可能性を探索することに積極的である。程度の差こそあれ、この2者の生活圏が既存の人間関係から離脱できないのに対して、「ジャンプ型」は、既存の人間関係を維持する一方で、そこを大胆に飛び越え、まったく新規に、しかも独力で、次々と生活圏の外延に向かい、同郷人の枠を超え、他の中国地域出身者や、進出先の外国人とも「遠距離交際」の人間関係を開拓していく。

温州人企業家のネットワークでは、家族、親戚、同郷の友人、知人をベースにしたソーシャル・キャピタルが豊かであり、彼らの大半は、同郷人コミュニティに深く埋め込まれた「現状利用型」および「動き回り型」で

あるが、異質な人々をつなぎ、より普遍的で合目的な信頼関係を構築する「ジャンプ型」が一定数存在し、頻繁に外部とのリワイヤリングを行い、その成果を他の2タイプの同郷人とも共有し合うことから、温州人が形成するネットワークは全体として、情報伝達特性に優れたスモールワールド・ネットワーク型の特徴を備えていることが推定される。

(4) そうした特徴を比較検証するため、空間的に温州に近く、温州同様に、改革開放後、新華僑を多く出した福建省沿岸部の福州市（特に傘下の福清と長楽）や内陸部の三明市出身者に焦点を当て、彼らと温州人と間で、価値基準やネットワーク構造、コミュニティ・キャピタルの多寡などにいかなる違いがあるかを比較検証した（西口・辻田 2016b）。その結果、温州人は、日本のような「起業環境」に問題が多い国を巧みに回避し、移民に寛容な国や地域で比較的早期に正規の滞在許可を得て起業し、先に成功した者が、後続の同郷人を全面支援し、そのプロセスが循環していく傾向が強く確認された。総じて温州人のコミュニティ・キャピタルは、福建人に比べて豊かで堅固であり、このことが異郷においても最低限の生活を保障するセーフティー・ネットとして、さらに、起業に必要な経営資源を獲得するための有用な社会基盤として機能していることが示された（西口・辻田 2016a/b）。

対照的に、福建人や東北人の同郷コミュニティでは、人々の関係が個人主義的でアトミスティックであり、個人的に成功したジャンプ型の企業家の存在は確認されたが、彼らと同郷人の現状利用型や動き回り型との間の結束力が脆弱で、ジャンプ型の恩恵、いわばおこぼれを、コミュニティの各メンバーが享受できる構造になっていない。これに対して、温州人は、遠距離交際ができるジャンプ型と、近所づきあいが中心か、あるいは、それしかできない現状利用型と動き回り型とが、ともに同じ同郷人コミュニティに深く埋め込まれ、メンバーとして緊密に相互交流しているがゆえに、全体として、一部の者の資源が他のメンバーに行き渡りにくい構造のコミュニティに属する他地域出身の中国人を、はるかに凌ぐ集団的繁栄を手にすることができたのではないか。

もちろん、温州人の繁栄を可能にしたマクロ的前提条件として、中国経済が急成長を遂げ、彼らの主な進出先であった欧州経済も浮沈はあったが比較的安定して発展した、欧州においては、外国人移民の絶えざる流入もあって、温州（中国）企業が生産する「中下級」レベルの日用品を中心とする商品への需要が担保されていた、といった歴史的諸条件が重なったことも指摘できる。

とはいえ、そうした環境下において、すべての中国人、すべての華僑・華人が、同じように繁栄したわけではない。温州人の中には、

血縁者や同郷者しか信用しないが、困っている血縁者や同郷者にはこぞって手を差しのべ、決して落後者を出さないという強固な社会連帯（community cohesion）が、一再ならず認められる。また、温州人には1世紀以上前から、近年に比べると細々としていたとはいえ、貧しさ故に、先取的に他の人々が行きたがらない奥地を含む中国各地や海外に進出し、一攫千金を狙う伝統が根強くあった（李 1997）。さらに、改革開放以降に噴出した、見かけ上のランダムな移動によって、各国、各地域にクリティカル・マスとして居住するようになった温州人同士が、国境を意識することなく、最新の市場情報を交換し、個人的に無担保で資金を融通し合い、さらに、先に進出して豊かになった温州人が、後続の同郷人に住居や職を提供し生活をサポートするといった傾向は、福建省、黒竜江省等を含む、そうした活動が相対的に微弱な他地域出身の中国人に比べて、歴然とした優位性を与えていた。

(5) 本研究では、温州語という特殊な方言を持ち、強固で排外的な社会的凝集性を示す温州人のうち、人口の2割を占める「離郷人」が、適度にランダムな動きをしながら、国内外にある「遠く」のオイシイ情報を適時にコミュニティ仲間にもたらし、双方で緊密に連携しながら、他に先んじて新市場を開拓し、コミュニティ全体に繁栄をもたらし、そうした構造優位を支える、血縁・同郷という確固たる同一尺度に基づく強靱な信頼関係が醸成されていること、そのため、同コミュニティの成員間には、この「同一尺度の信頼」（commensurate trust）によって、ネットワーク分析とコミュニティ運営の両面で、予測と制御の可能性が増すこと、を実証的に論じた。コミュニティ・キャピタルという新たな中範囲の概念は、旧来の社会ネットワーク分析の方法論では一方的に切り捨てられ、その存在すら忘れられがちであった「不都合な（とはいえ、研究上、実践上、必須の）真実」に再び光を当て、よりバランスの取れた豊かな知見の導出に役立つ。

だが、温州企業や温州人が形成してきた社会ネットワークは、これまでの温州経済の発展に対して多大な役割を果たした反面、企業のさらなる質の向上や産業構造の高度化に対しては逆に拘束性を有し、2011年に温州に端を発した金融危機において連鎖倒産といった負のスパイラルを引き起こす一因ともなった。温州人コミュニティは依然として、赤の他人を無条件に信頼する「普遍化信頼」が十分に醸成されていない社会であり、そうした観察結果は、経済活動の分析にあたって、最新のネットワーク理論やコミュニティ・キャピタル、信頼、社会的埋め込みといった枠組みを用いて分析することの有用性ととも、観察対象そのものが内発的に課す

制約条件についても重要な示唆を与える。

<引用文献>

- Becker, G. S. (1964). *Human capital: A theoretical and empirical analysis, with special reference to education*. Chicago, IL: University of Chicago Press.
- Coleman, J. S. (1988). Social capital in the creation of human capital. *American Journal of Sociology*, 94, S95–S120.
- Coleman, J. S. (1990). *Foundations of social theory*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Fleming, L, King, C., & Juda, A. I. (2007). Small-worlds and innovation. *Organization Science* 18, 938–954.
- Fujimoto, T. (1999). *The evolution of a manufacturing system at Toyota*. New York, NY: Oxford University Press.
- Granovetter, M. S. (1985). Economic action and social structure: The problem of embeddedness. *American Journal of Sociology* 91(3), 481–580.
- 李丁富 (Li Dingfu) (1997). 『温州之謎——中国脱貧到富的成功模式』 (The enigma of Wenzhou: A successful model from poverty to affluence). 北京: 改革出版社.
- Merton, R. K. (1968 [1949, 1957]). *Social Theory and Social Structure*. New York, NY: Free Press.
- 西口敏宏 (2007). 『遠距離交際と近所づきあい——成功する組織ネットワーク戦略』 NTT 出版.
- 西口敏宏・姜紅祥・辻田素子 (2012). 「リーマン・ショック以降の温州企業——温州モデルの再考」ワーキングペーパー WP#12-06, 一橋大学イノベーション研究センター.
- 西口敏宏・辻田素子 (2016a). 「国際起業成功の秘密を探る——コミュニティー・キャピタルに根差す中国温州人の越境戦略」金光淳編『ソーシャル・キャピタルと経営』第5章所収予定, 京都: ミネルヴァ書房近刊.
- 西口敏宏・辻田素子 (2016b). 『コミュニティー・キャピタル——中国・温州企業家ネットワークの繁栄と限界(仮)』東京: 有斐閣近刊.
- Polanyi, K. (1944). *The great transformation: The political and economic origins of our time*. Boston, MA: Beacon Press.
- Putnam, R. D. (1993). *Making democracy work: Civic traditions in modern Italy*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- Putnam, R. D. (2000). *Bowling alone: The collapse and revival of American community*. New York, NY: Simon &

Schuster.

- Shultz, T. W. (1961). Investment in human capital. *American Economic Review*, 51(1), 1–17.
- Watts, D. J. (1999). Networks, dynamics, and the small-world phenomenon. *American Journal of Sociology*, 105, 493–527.
- Watts, D. J. (2003). *Six degrees: The science of a connected age*. New York, NY: Norton.
- Watts, D. J., & Strogatz, S. (1998). Collective dynamics of small-world networks. *Nature*, 393, 440–442.
- Womack, J. P., Jones, D. T., and Roos, D. (1990). *The machine that changed the world*. New York, NY: Rawson Associates.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計12件)

西口敏宏 (2014) 「温州企業家成功への道 ネットワークとソーシャル・キャピタルの活用」『世界経済評論』58(2): 17-21 査読無.

西口敏宏 (2014) 「コミュニティー・キャピタル」『世界経済評論 IMPACT』7月4日 http://www.sekaikeizai.or.jp/active/article/140714nishiguchi_toshi.html 査読無.

〔学会発表〕(計4件)

西口敏宏「コミュニティー・キャピタル——中国・温州人企業家ネットワークの繁栄と限界」2015年度組織学会研究発表大会報告 一橋大学(東京都・国立市)2015年6月21日発表予定

西口敏宏「中国・温州人企業家の国際ネットワーク分析——いかに地域と世界をつなげ、繁栄するか」2014年度組織学会年次大会統一論題報告 県立広島大学(広島県・広島市)2013年11月9日

西口敏宏「地域発ネットワークのグローバルな繁栄——温州人企業家の台頭と限界」国際ビジネス研究会第20回全国大会 創立20周年記念大会 自由論題 近畿大学(大阪府・東大阪市)2013年10月27日

〔図書〕(計2件)

西口敏宏・辻田素子 (2016a). 「国際起業成功の秘密を探る——コミュニティー・キャピタルに根差す中国温州人の越境戦略」金光淳編『ソーシャル・キャピタルと経営』第5章所収予定, 京都: ミネルヴァ書房近刊.

西口敏宏・辻田素子 (2016b). 『コミュニティー・キャピタル——中国・温州企業家ネットワークの繁栄と限界(仮)』東京: 有斐閣近刊.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

西口 敏宏 (NISHIGUCHI, Toshihiro)
一橋大学・大学院商学研究科・教授
研究者番号：20270928